

新聞に親しみ、新聞から学ぶ～ことばの力を育成するために～

加古郡播磨町立蓮池小学校 校長 若松 育雄

教諭 真嶋 睦子

1. はじめに

本校では、平成 23、24 年度ひょうご学力向上推進プロジェクト「ことばの力」育成事業の研究指定を受け、「説明する理数教育」をテーマに研究を続けてきた。朝の学習タイムで読書や音読タイム、ボランティアによる読み聞かせなどを行い、日本語の大切さや言葉による文化の伝承、コミュニケーション能力を育ててきた。また、NIE 実践指定校となり、2 年目である本校では、昨年度の反省から、新聞記者招致活動時期や国語科、総合的な学習の時間の単元構成を見直し、より充実した内容となるよう取り組んできた。

各教科の単元構成や、学習内容から見て、本校では昨年度と同様に、5 年生を中心とした 1 年間の NIE に取り組むこととした。

2. 実践の概要

(1) 新聞を身近な存在に

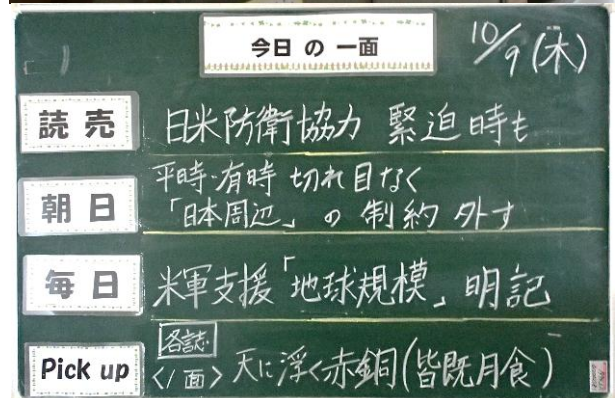
5 年生に行った新聞アンケートから、以下の実態が見えてきた。

1 家で新聞を購読しているか		
はい	いいえ	わからない
65%	27%	8%
2 家でどのくらい新聞を読んでいたか		
毎日	時々	読んでいない
0%	54%	46%

新聞を購読している家庭が約 6 割ほどであり、普段、新聞自体を目にすることも少ない児童が約

4 割近くにも上る。新聞が誰でも、いつでも読める環境を整えることが一番だと感じ、新聞コーナーを 5 年生教室横の渡り廊下前に作った。この廊下は普段も高学年を中心に、全校児童が利用するため、5 年生だけでなく他学年の児童や教員も、気になった時に自由に閲覧できた。

また、新聞は NIE の提供により、常に 3～6 社の新聞を読み比べられる。その日の各社トップ記事やピックアップ記事を黒板に書き出し、興味を持てるようにした。2 学期後半以降は学習も進み、新聞に興味を持つ子が増えたため、クラスで係を作り、黒板に書き出す仕事をさせた。「なんで新聞社によってトップの記事が違うのか興味を持った。お薦めの記事を探すのが楽しかった」と感想を話していた。休み時間には廊下の端に用意した椅子に座って黙々と新聞を読む児童の姿が見られるようになった。



(2)スピーチで社会の出来事を知ろう、伝えよう、広げよう

新聞を読める環境が整った後、新聞スピーチを取り入れた。読んで気になった記事、皆に伝えたいと思った話題を取り上げ、新聞名、内容、感想を話す。初めは、新聞記事をそのままメモに写して読む子も少なくなかったが、話形を作ったり、得意な児童にお手本をさせたりしていると、次第に慣れてきた。やがて記事の情報を整理し、分かりやすく要約する力を付けることにもつながると考えられる。また、聞いている方も、「あ！それ知ってる！」「へえ～そうなんだ」と社会の情勢等についても関心を持つことができた。

(3) 新聞記事を読み比べて見出しを見つけよう

5年生の国語科では、「新聞記事を読み比べよう」という教材がある。この教材では、新聞の特徴と作り方を知り、さまざまな観点からの読み比べと、その活動を生かして、書き手の伝えたい事柄を読み取り、効果的な見出し作りを行った。同じ内容の記事でも、クローズアップする部分や、書き手の意図が異なると、随分違った印象を受けるものである。N I E活動の一環で毎朝届く新聞を利用し、新鮮で、児童の関心の高かった1面の記事を取り扱い、読み取りを行った。サイドラインを引きながら書き手の意図を読み取ろうとしたり、同時に2社、または3社の記事を読み比べながら相違点を読み取ろうとしたりと、目的に応じて、効果的な読み方を選択し活用しようとする姿が見られた。

「見出しをつける」活動では、限られた文中で、書き手の意図をより効果的に他者へ伝える工夫を考える活動である。正確に書き手の意図を読み取ることと、他者に伝える工夫を意識したこの活動は、「読むこと」の目的に応じて要旨を捉える力の育成と「書くこと」の表現の効果などを確かめたり工夫したりする力の育成に効果があったと考えられる。また、実際の新聞記事で、同じ内容でも少しずつ報じられ方に違

いがあることに児童は非常に興味を持ったようであった。

(4) 新聞記者の招致

総合的な学習の時間 ～新聞記者になろう～

国語科の(3)の学習後、自然学校での体験をまとめた新聞作りを行った。国語で学んだ新聞の作り方を生かしながら、レイアウトや見出しに各自、工夫を凝らして新聞を作成した。



その後、県N I E推進協議会に新聞記者派遣を依頼し、2014年10月7日、読売新聞姫路支局の藤田真則記者に話を伺った。新聞記事の作り方や、新聞社・記者の仕事など実際の道具を見せながら説明をしていただき、児童も興味深く話を聞いていた。質問にも丁寧に答えてくださり、その3日後に控える新聞社見学もさらに楽しみになったようであった。最後に児童が作成した新聞を藤田記者に評価、アドバイスをもらった。本物の記者さんに生の声でアドバイスをもらえる貴重な体験であった。

〈児童の感想より〉

○新聞記者の藤田さんという方が来られた。新聞についてのことや、記者の仕事についてたくさん教えてもらってとても勉強になった。一番心に残ったのは、「事実をそのまま伝えるだけ

じゃなくて、その事実のかけには、努力している人や支えてくれている人たちがいる。その見えない部分を伝えていきたい」という話だ。私もその心を持ちたいと思った。習った事柄は新聞を書く時に生かしたい。



○私は今までずっと「記者さんって大変そうだなあ」とか「文を書くのってしんどいだろうなあ」など、いろいろ大変と思っていた。新聞なんて字が多いから読む子も少ないだろうし…などと、新聞にはあまり目を通さなかった。でも、記者さんが来てくれるというので、新聞の良いところなどを知ろう！ と思った。配られた新聞の一部にも藤田さんの名前が入っていて、すごいと思った。ほかにもいろいろな話を聞いて、へえ〜と思うことがたくさんあった。「世の中の出来事を多くの人に伝えたい」との思いから私は、新聞をもっと読もうと思った。書く時のコツも教えてくださったので、これからの新聞作りに役立てたい。

(5)朝日新聞社見学

2014年10月10日、朝日新聞社を見学した。国語科での学習、新聞製作、記者派遣事業と、連続的な学びから知識も増え、より深い疑問等が出てきた時期である。楽しみにしている児童が非常に多かった。

新聞の作り方や用語、地方による違いや、新聞の歴史などを学んだ。また、実際に新聞社の方が仕事をしているフロアも見学させてもらった。パソコンを使った割り付けの作業工程を解

説してもらい、自分たちの写真入り特製新聞が完成したのを見ると、子どもたちは感激していた。今まで敬遠しがちだった新聞が、これまでの学習を通して、より身近で面白いもの、読んでみたいと思うようになってきた様子であった。



(6)〇〇新聞作り

教科を問わず、学習した事柄をまとめる際にクラスの実態に応じて新聞作りを行った。

国語「森林のおくりもの新聞」、理科「天気新聞」、社会「水産業新聞」、総合「運動会新聞」等。

3. 成果と課題

(1)成果

新聞をいつでも、誰でも読めるようにしてから、新聞コーナーで新聞を読む児童が見られるようになった。また、新聞スピーチをすることで、初めは抵抗があった児童も新聞に触れる機

会ができた。新聞スピーチでもそうだが、教師も記事の話題を積極的に取り上げることで、自然と社会情勢が耳に入ってくる環境を作った。すると、初めは興味なさそうにしていた児童たちも、「知ってる知ってる！ それはな…」と自分の言葉で積極的に話をするようになってきた。学期末のアンケートには、以下の結果が表れている。

前より新聞を読むようになったか		
はい	いいえ	前と同じだけ読んでいる
54%	8%	38%

〈読むようになった理由〉

- ・学習して、こんな事が載っているんだと思って気になったから。
- ・新聞の面白さを知った。
- ・興味がわいたから。
- ・社会で今どんな事が起こっているのかが分かるから。
- ・新聞記者さんたちの仕事の大変さが分かって少し新聞に興味を持ったから。
- ・いろいろ詳しく載っていることに気付いたから。
- ・世界や日本についてもっと知りたくなったから。

新聞は難しいから…と思い込んでいた児童も、実際に学んでいくうちに新聞の奥深さ、面白さに気付いたようである。やはり、新聞社や記者さんとの出会いや、年間を通して、教科を問わず新聞を書く中で、新聞を身近に感じ、自分の生きる社会の出来事に関心を持つようになったからと考えられる。

また、新聞スピーチでは要点を押さえて内容をまとめ、聞き手に分かりやすく伝えることを目標に行ってきた。個人差はあるものの、要旨

を読み取る力や、話す内容を精査する力の育成に効果があったと考えられる。

〈新聞学習を終えて 児童の感想より〉

- ・いろいろな情報を取り入れられて良かった。
- ・新聞はすごく役に立つことが分かった。これからは新聞を読んでいきたい。
- ・新聞を読んだり書いたりして、今まで知らなかったことが知れたりして楽しかった。
- ・とても楽しかった。終わらずに（6社新聞購読を）続けてほしい。

(2)課題

低学年での新聞活用が難しいと感じた。しかし、低学年のうちから新聞を身近なものとして感じる事ができていたら、高学年での反応や学習内容もより高度なものを求められるかもしれない。今後の課題である。

また、家庭との連携も必要だと感じた。家庭での新聞購読自体が少なくなっている事実がアンケートからも分かる。新聞の大切さや面白さを児童だけでなく、保護者の方々にも伝えられるような工夫が必要だったと感じた。

4. 終わりに

本校では2年間のN I Eに取り組んできた。活字離れが叫ばれる中、あらためて新聞の大切さ、奥深さを教師ともども、子どもたちと一緒に学んできたように思う。手探りの実践ではあったが、着実にことばの力が児童に身に付いていると感じた。情報社会に生きる現代の子どもたちがより正しく情報を取捨選択し、相手に伝えていくための基礎的な力を新聞学習から学ぶことができた。ここで終わりではなく、今後もこの2年間の活動で得た物を生かして、新聞学習を授業に取り入れていきたい。